
TWIN TRICK

snow+

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TWIN TRICK

【Nコード】

N8658A

【作者名】

snow+

【あらすじ】

園子に誘われて来たパーティで、コナンは連続殺人に遭遇する。犯人が死んでしまう…という殺人事件が起こったのだが、小五郎が眠らずに事件を解決する…？

パーティのお誘い

「うわぁー！」

「すごく大きいー！」

一軒の豪邸の前で、コナンと蘭は一斉に声を上げた。

「もちろんよ！ここは、鈴木財閥と肩を並べるくらいの財閥なもの。」

「

「……じゃじゃ馬娘には、金持ちの知り合いがゾロゾロという訳か。」

そう。この豪邸の主が鈴木財閥と仲が良い関係で、コナンと蘭と小五郎は園子に連れられとある財閥のパーティに出席することになったのだ。

昨日。

学校が終わり蘭と園子はいつものよう下校していたのだが、園子の一言で蘭たちもパーティに行くことになった。

「ねえ、蘭……明日暇？」

「え？急にどうしたのよ？」

園子は別れ際に、蘭を引き止め話しかけた。

なんでも、明日は休日なので、蘭に着いて来てほしい所があるんだとか。

「あのね、蘭。明日パパの友達の財閥のパーティに行くことになったんだけどねえ。パパとママ、明日は急用が出来ちゃって……。あたしだけでもどうしても挨拶して来てって言われたんだけど、いくらなんでも、一人じゃ……。ねえ？」

「……だから着いて来てほしいの？」

蘭は園子の心を見抜いた口調で言った。すると園子は手を合わせ答えた。

「お願い！蘭！おじさまも一緒に来てっ！」

「お、お父さんもお?！」

「そのパーティーねえ、財閥80周年パーティーなのよ。で、有名人も沢山呼んでるらしいのよ。そこのおじさまも眠りの小五郎のファンだし。それに……」

園子は少し困った口調で話し、途中でうつ向き黙ってしまった。

蘭は園子を覗き込み聞いた。

「それに?」

園子はさつきとはケロっと変わった顔でコチラを向き、舌を見せ話した。

「それに、そこのおじさまに、眠りの小五郎連れて行きます!って言っちゃったんだもん!」

「えー!?! もう! 私知らないよ」

蘭は呆れた顔で家に向かい歩き始めた。そんな蘭に、園子は少しふざけながら着いて行った。

「ただいま!」

「おかえりなさい!」

蘭が事務所へ入ると、真つ先にコナンの返事が帰って来る。

蘭は、事務所のソファに座りマンガ『少年サンデー』を読んでいるコナンに話しかけた。

「お父さんは?」

「ここだよ……」

コナンは呆れながら事務所の机に目をやる。

すると小五郎は酔っ払い、いびきをかきながら机の上で寝ていた。周りにはビールの空き缶が沢山置いてある。

「お父さんっ! もうー!!」

「おじさん、ボクが帰って来たらすでにこうだったよ。」

マンガのページを捲り、呆れながら蘭に返す。

コナンの言葉を聞き、蘭は小五郎の体を揺さぶってみた。

「お父さんっ! 起きて!!」

「…ふにゃ」

小五郎はまだ目を覚まさず、寝言だけを言っている。

「あらあら…話どころじゃないようね。」

「園子姉ちゃん、なんか話があつて来たの？」

事務所のドアに背をもたれ小五郎に呆れている園子に、コナンが聞いた。

「パーティに行くのを誘いに来たのよ。」

「へー！なんのパーティなの？」

コナンの質問に、園子もソファーに座り話し始める。

ヤジマサイバツ

「谷嶋財閥って言つてね。今年で80周年を迎えたのよ！そここの主人はパパと昔からの友達だからパーティに呼ばれたんだけど、パパとママが行けなくなつてさ」！

「（ハハハ…。またこのパターンでこつちが誘われる訳ね…）」

コナンは話の途中から少し呆れ聞き続けた。

「で、あたし一人じゃ行きにくいでしょ？だからおじさまを誘おつて思つて来たのよ！明日も丁度、休日だしね。」

「蘭姉ちゃんは何行くの？」

小五郎を起こすのを諦めた蘭も、園子の隣に座り聞いていた。

「お父さんが行くんなら……」

と、蘭が言いかけた途端、小五郎の声が聞こえた。

「俺は行かねーぞオ」

こつちを向いている小五郎の顔は、真っ赤だ。相当酔っているらしい。

「あら、そう？年代もののワインやお酒がたくさんあつて、お料理も豪華なのに…。」

…出た！園子お得意のものでする作戦！

いつもの小五郎ならそんなのは断るが、今は酔っていて何も考えていない。返事はもちろん…

「んなら、行つてやつてもいいか…！お酒」

「（大丈夫か、この親父……）」

「マジ！今の言葉みんな聞いたからねっ！じゃあ明日の12時、迎えに来るから！パーティは夜6時からだからね！またメールするわー」

コナンは小五郎を見何度も呆れたが、園子は喜んで帰って行った。

パーティのお誘い（後書き）

考えている事件は、トリックとか考えてませんが、よろしくお願いします！（笑）

小説名にはトリックって入ってるんだけど…（爆）

私はトリックを考えられる程の悩を持っていませんので（笑）

おっちゃん活躍させるつもりです。

コナンも活躍する…と思うので（笑）、よろしく願いしまーす！

谷嶋財閥

翌日。

今日はパーティに行く日だ。昨夜届いた園子からのメールに従い、コナン・蘭・小五郎の三人は準備をしている。

「蘭へ♪」

明日、12時に行くからねん

それまでに用意しててちょ↓だいっ！

昼食は、谷嶋財閥の方が出してくれるみたいよ。

パーティは午後6時から。

谷嶋財閥は神奈川県横須賀市だからア！

ウチの執事に送ってもらえるからね

それじゃあそういうことで！

おやすみ♪

園子』

蘭はピンクのワンピース、小五郎は黒のスーツ、コナンもいつも着慣れない白のスーツを着ている。

「あ！コナン君！ズレてるよ。」

「ありがとう…。」

蘭に服装を直してもらい、コナンは少し照れている様子。

「はいっ！ネクタイは自分で付けてね？」

「はぁーい！」

蘭に直してもらうと、机にある青い蝶ネクタイに手を伸ばした。これは変声機ではなく、普通の蝶ネクタイだ。

「（今日はこっちは必要ねえだろ…）」

コナンは青い蝶ネクタイを結び終わると、変声機を部屋へ戻しに行った。

”ピンポン”

時計の針が12時00分になったと同時に、事務所のインターホンが鳴った。

「はぁーい！」

蘭がドアを開けると、園子が立っていた。

「おはよう！蘭！用意出来た？」

「ええ。大丈夫よ！」

「それじゃあ、行こっか！」

と言うと、園子は階段を駆け下り先に車へ戻った。次に小五郎も階段まで出た。

「じゃあ、行くか。」

「コナンくん！行くよー！」

「はぁーい！」

コナンも部屋から出て来、最後に小五郎が事務所に鍵をかけ三人は車に乗った。

「園子お嬢様、谷嶋財閥家へ着きました。」

あれから二時間程でやっと谷嶋財閥宅に着いた。コナン・蘭・小五郎の三人は、乗って来た車の運転手の執事に礼をした。

そして車を降り、谷嶋財閥の豪邸を見上げた。

「うわぁー！」

「すごく大きいー！」

その豪邸の前で、コナンと蘭は一斉に声を上げた。

「もちろんよ！ここは、鈴木財閥と肩を並べるくらいの財閥なもの。」

「……じゃじゃ馬娘には、金持ちの知り合いがゾロゾロという訳か。」

小五郎も最後に続きこう言うと、園子はインターホンを鳴らした。

”ピンポン”

《……はい。どちら様でしょうか？》

インターホン口から、お手伝いさんの声がする。

園子は画面付きのインターホンだろうと思い、インターホン下にあるカメラに、カメラ目線で答えた。

「鈴木園子です！」

《鈴木財閥の園子様ですね！少々お待ち下さい。》

相手の口調は、初対面から知り合いに對しての口調に変わった。すると豪邸の門が開き始めた。なんとも歴史ある音のように聞こえる。

”ギー—ッ”

しばらくして門が完全に開くと、またインターホン越しに声がした。

《どうぞ、お入り下さい。》

その声を聞くと、コナン・蘭・園子・小五郎は豪邸へと入って行った。

谷嶋財閥（後書き）

コナンの服装は、SSコミック15巻の表紙のコナンをモデルにしました。

さて財閥のパーティに来たけど、これからどうなるのでしょうか？

財閥の主

谷嶋財閥の豪邸へ入ると、お手伝いさんにパーティ場へと連れられた。パーティ広間は人が大勢いて、まだ準備中だ。

そして奥から谷嶋財閥の主人、谷嶋孝信（52）が手を挙げやって来た。

「おー！園子ちゃん、久しぶりだねえ！しばらく見ないうちに大人になっちゃって！」

「おじさまもダンディになりましたわ♪」

二人は握手を交した。

孝信は小太りでひげを生やし、いかにもかっぶくの良さそうに見える。

そんな孝信は小五郎に気付き、腰を低く挨拶した。

「おおー！あなたは毛利小五郎さん！こんな私でも、存じあげていますよ！会えて光栄です！」

そう言うと、孝信は小五郎に握手を求めた。

「いやいや、こちらこそ！このような素晴らしいパーティに招いて頂き、光栄ですなー！えっと俺の隣にいるのが娘の蘭と、居候のコナンです。」

「（だからそれやめろって！）」

いつもの決まり文句を言うと、小五郎は孝信と握手を交した。そんな小五郎を見てコナンは一人心中の中で、

「（酒目当てで来たくせに…）」

と思ったのだった。

「恥ずかしながら、パーティはまだ準備中でして…。昼食を用意しますので、庭でお食下さい。」

「いいんすか？どうもありがとうございます！」

小五郎が後頭部に手を当ておじきすると、準備中のこのパーティ広間に金髪の男性が一人やって来た。

「…誰っすか？」

「あの人…確か……」

その男性を見園子が考え込むと、後ろから孝信が話した。

「あいつは、私の息子ですよ。」

「ほー！そうなんすか！」

金髪の男性を見ながら、蘭は園子の耳に手を当てこっそり聞いた。

「孝信さんの息子さんってことは、財閥の後継者になるんでしょ？」

あんなにチャラチャラしてて大丈夫なの…？」

「あの人、確か双子で、晃一さんはお兄さんよ。昔はもっと真面目だったのに……」金髪の男性は服装もブカブカのズボンを履いたり

していて、誰が見ても財閥の息子とは思えないくらいだ。

そしてこっちに気付いたのか、ゆっくり歩いて来る。

「よお！親父！久しぶりー！」

孝信は今にも怒りそうな顔で男性に喋りかけた。

「これ！今日は毛利さんが来て下さったのだよ！礼儀正しくしなさい。」

孝信の言葉を聞き、男性は小五郎を見た。

「えっとー？あんた確か……、寝坊の小五郎だっけー？」

「この……野郎……」

小五郎は今にも殴ろうと、手をグーにしプルプル震わせている。

しかし孝信の前なので殴れないので我慢しているが。

「なんてことを言うんだ！毛利さん、すみません…。」

「いやあ……！」

「コイツは私の息子の晃一です。こんな野郎ですが、どうぞよろしくお願いします。」

この金髪の男性は、孝信の双子の息子の兄だ。谷嶋晃一（22）。

孝信はそう言っていると晃一の首を持ち、小五郎に礼をさせた。

「どうも。」

「あのか？晃一さんってミュージシャンかなんかやってるんですか？」

そんな孝信と小五郎のやりとりを見た園子は、話に入っていく。園子に気付いた晃一は、園子に返事をした。

「あんた…鈴木財閥とこの。」

「鈴木園子よっ！覚えててくれたのかしら？あたしは晃一さんのこと、すぐには分からなかったけどねえ。」

「へー。それで？何で俺がミュージシャンだと？」

「だって、金髪でギター持ってるものっ！」

そう。晃一はここに来る前に、ギターケースを壁に立掛けたのであった。園子はそれをしっかりと見ていた。

「当たりだな。さすが園子ちゃん。ミュージシャンは、楽しいぜ？こんな金持ちの家継ぐよりかはよっぽどな！財閥だと言ってるけど、そんなの外だけ。最近は全然……」

「晃一っ！よそ様に何を話している！！」

園子と晃一の会話に、孝信がとうとう怒ってしまった。孝信は晃一の部屋を指差しながら、大声で叫んでいる。

「お前は早く部屋へ戻りなさい！！」

「…うるせー！言われなくなったら、ちゃんと仕事しろ！おふくるが早死したからって、若い恋人とばかり遊んでんなよ！！」

晃一はフンと部屋に向かった。

孝信は場の空気を戻そうと、汗を拭きながら謝っている。

「いやいや…こんなところを見られてしましまして……。お恥ずかしいです。」

「いや……」

小五郎は返す言葉もなく、戸惑っている。しかし、蘭が会話に入りなんとか話をまとめた。

「全然大丈夫ですよ！うちのお父さんとお母さんの方が、よっぽどうるさいですからっ！」

「蘭っ…お前……」

「だって本当のことでしょー？」

孝信も安心したのか、笑ってみせた。

「ハハハ！楽しいお父さんなんですネ！では、私もパーティーの準備があるので、失礼しますよ。」

孝信はそう言うとすぐさま準備に取り掛かった。

「孝信おじさまも大変なのね…。」

「そうみたいね…。」

「そりゃあ！財閥の主だからなあ。さつ、俺たちはメシ行くぞー！」

小五郎の掛け声で、蘭と園子は庭へ向かった。しかし、コナンは孝信をじーっと見ている。

「……………」

「コナンくん！行くよー！」

「はあい！」

そう返事すると、コナンも蘭に続き庭へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8658a/>

TWIN TRICK

2011年10月3日12時20分発行